

回想分析を用いた旧街道商店街の街路イメージの分析*

A Study on Image of Old High Streets Using Analysis of Memories on The Street*

亀谷一洋**・山中英生***・三宅正弘***

By Kazuhiro KAMETANI**・Hideo YAMANAKA***・Masahiro MIYAKE***

1. はじめに

わが国には、街道筋沿いに商店街として発達した中心街が多く見られる。しかし、近年の交通需要の増大に対応するため、中心街を迂回するバイパスが多くで整備された結果、旧街道筋が裏道化し、町の中心商店街が衰退するという現象が相次いだ。バイパス整備の目的は通過交通の排除によって市街地の交通状況の改善を図ることにあるが、実際には町としての活力をそぐというジレンマに陥っている。英国ではバイパス整備にあわせて旧道の歩行者化や活性化をパッケージ¹⁾する整備例が見られるが、わが国では体系的に取り組んだ事例は少ない。このため、旧街道筋住民には、旧道の利用方法や、現状についての不満も高い。

本研究は、このような旧街道商店街の再生方法を考える第一のステップとして、バイパス裏道化という歴史的推移を経験している沿線住民の市民意識をもとに、街路再生のコンセプトの抽出を行うことを目的としている。

そのため歴史的な変遷を経験した旧街道商店街において、沿線住民にインタビュー形式のヒアリングを行い、沿線住民が持っている街路イメージと旧街道型商店街が潜在的に持つ街路としての魅力を再利用して、旧街道型商店街の街路再生方法を提案するものである。

街路のイメージに関する研究は、安藤ら²⁾が、さまざまな街路を事例に、そのコンピューター・グラフィックスを用いてのイメージの定量化をおこなっている。平野ら³⁾は、繁華街での街路イメージの類型を明らかにしている。

本研究では、徳島県の羽ノ浦町商店街を事例として、この旧街道商店街に焦点を当て、回想分析法を用いて、沿道住民が持つ旧街道商店の街路イメージの分析を試みた。

2. 羽ノ浦町商店街の現状

羽ノ浦町は、徳島県の南部に位置し、県都徳島市から南に約15kmの距離にある、面積8.9km²、人口約12,000人の町である。

羽ノ浦町商店街は、羽ノ浦町の中心部に位置する延長約800m、幅員6~10mの旧国道沿いに発展した旧街道商店街で、古くは土佐街道として徳島県と高知県を結ぶ幹線街道上にあった。昭和初期には、一部道路の両側に幅2~3mの用水が流れていたが、昭和7年頃から順次、蓋がかけられ、昭和27年頃に商店街部分は全線蓋がかけられ、現在の道路断面形状が形成された。さらに、昭和44年に商店街を迂回す

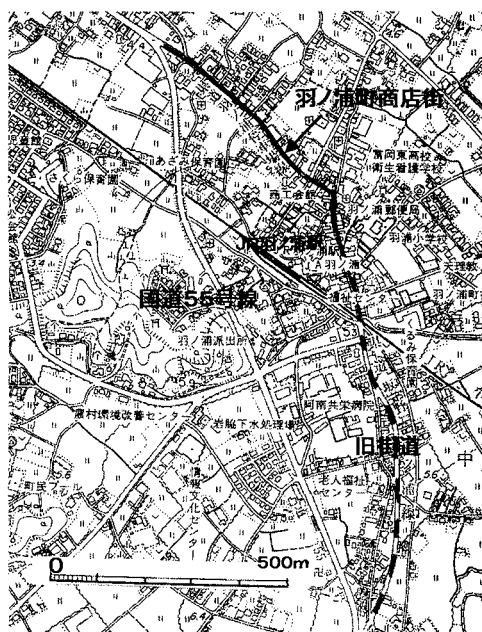


図-1 羽ノ浦町商店街位置図

*キーワード：地区交通計画，イメージ分析，市民参加

**学生員，徳島大学大学院工学研究科

(徳島県徳島市南常三島町2丁目1番地)

***正員，工博，徳島大学工学部建設工学科

(徳島県徳島市南常三島町2丁目1番地，

TEL088-656-7350， FAX088-656-7579)

る国道バイパスが完成し、旧街道は県道となる。現在、商店数は43店舗、民家は37軒、その他3軒となっている。



写真—1 羽ノ浦町商店街の現況

3. 回想分析による沿道住民への個別ヒアリング

本研究では、上記のような変遷を持つ街路に対する沿道住民の意識を調べるために、回想分析と呼ぶ方法を試みた。ここで回想分析とは、今までの日々の生活において、前の道路で思い出す楽しかった(よい)イメージ、わるいイメージを被験者1人1人にインタビューし、その要素と連関を分析する方法で、臨床心理で用いられる重要事項分析の手法を道のイメージ抽出に改良したものである。

被験者は、住民8名を対象で、50代から80代の男性7名、女性1名である。今回は、被験者の年齢属性に偏りがあるが、過去の道路に関するイメージを思い出してもらうため、対象道路に接して生活しており、地域に住んでいる期間の長い年輩の人の意見をきくことが重要と判断した。また、インタビューには十分な時間(30分～1時間以上/人)をかけ、その内容の分析と考察に主眼を置くため、被験者数は少なくなっている。

インタビューの手順を以下に記す。

- 1) 被験者に「家の前の道で思い出す、よいイメージ、わるいイメージの出来事や体験したことを何でも自由にお話ください。」と問いかける。そして発言内容の時代や被験者の気持ちを確認するため、「それはいつの頃の話ですか。」とか「そのときあなたはどう思いましたか。」などの質問をはさみながら、その時の道路状況を具体的に話させ、イメージの年代を確認する。
- 2) 引き続き、「他に家の前の道で思い出す、よいイメージ、わるいイメージの出来事や体験したことはありませんか。」と問いかけ、そのイメージの年代を確認する。被験者に自由に話をしてもらうことを目的とし、インタビューは、聞き手に徹して、時代や道路状況を確認する問いかけのみを行うよう

に注意し、この問いかけを繰り返す行う。

インタビューは、平成13年11月と平成14年6月に数回に分けて行った。一連のインタビューは全てテープに録音している。以後、被験者に対して、「家の前の道」という言葉で説明しているため、文中でヒアリングに関係するところは、街路ではなく、道路と表現している。

4. 回想分析の結果と考察

(1) イメージラダーでの分析

次に発言項目の内容を分解し、D.N.Hinkelによって開発されたラダーリング技法⁴⁾を参考に以下の方法でイメージラダーを作成した。

たとえば、「夏祭りに人がたくさん来てくれて楽しかった。」という発言は、発言を「夏祭り」、「人がたくさん来てくれた」、「楽しかった」に分ける。

そして全体の概念である「夏祭り」を上位項目に、具体内容としての「人がたくさん来てくれた」を下位項目として配置し図上では矢印で示す。そして、「楽しかった」はよいイメージに分類する。図では、わるいイメージのみ▲印で表している。

結果を図-2に示す。これから、以下のことがわかる。

- ① 道路に対して持っているイメージは、交通に関する発言が多かった。しかし、その内容は自動車交通の発達とともに、自動車やバスを時代の象徴として誇らしくみる時代から、それらが一般的に普及することにより、長所短所併せ持つ日常的乗り物としてみている発言に変わってきている。また、8名全員が用水についての発言をしていて、昔あった用水を沿線住民はよく覚えているといえる。夏祭りなどのイベントと商店街の状況についての発言は5名となっている。景観についての発言は2名であった。
- ② 時代の変遷により、被験者の家の前の道路について持っているイメージが交通に関する項目に移っていることがわかる。これに対して、イベントや商店街の状況は、昭和初期から戦後まもなくまでは項目として多くあげられてきたが、昭和44年のバイパス開通後からは、過去を懐かしむイメージとしての発言しかなく、商店街としての活力の低下が感じられる。
- ③ 以前に道路に沿って流れていた用水については、危険というイメージと、自然を感じ、楽しんだという、両方のイメージを持っている。用水路に蓋がかかって、用水に落ちる危険はなくなったが、自動車や自転車家が家の隣までくるようになり、危険になったと感じる人もいた。
- ④ 被験者は、夏祭りなどのイベントや商店街での

発言内容の キーワード	発言内容				
	長 瀬 (2)	用 水 (8)	イベント (5)	商店街 (5)	交 通 (8)
時代の変遷 昭和初期	見晴らしが よかった → 周りに建物が なかった	▲危険 (3) → ▲人がよく落ちていた 水がきれいだった (2) → 那賀川の水を引き込 んでいる (2) 魚がいた (2) → 泳いでいた (2) 川へ降りる階段があった 家への出入りは不便だった → 家への出入りは木造船の板 の使い古しをつかった	夏祭り (5) 高知大阪間のマラソン大会が あり選手が前の道を走った	農作物の集配地だった 駅への玄関口だった (2) → 馬車で通っていた → 大八車で通っていた	馬と車と自転車が通っていた (2) 馬車が通っていた 大型の製材運搬車が通っていた
昭和20年 頃	見晴らしがよかった → 向かいの建物が 移転した	水がきれいだった (2) → 崖が崩れていた → 石垣の水路だった → 魚がいた → いろいろな生物がいた	戦後商店街で阿波踊りをした → 道路に露天商がでていた 人がたくさん来てくれた (3) 山車がでていた (2) 提灯が並んでいた (2) 各丁単位で参加した (2) 花火があった (3) 笹飾りが並んでいた → 各家を見て回った (2)	一脚 (縁台) の 世間話をしていた 縁台将棋をしていた (2) 夏に風呂からでて涼んでいた 風呂屋の湯りに集まっていた → 近所の交流があった 商店が遠くまで開いていた 商店が多かった 製材屋で働いている人達がよ く来てくれた カフェがあった 通行人が多かった	バスが通っていた → 家の前がバス停だった → 自動車と対向ができなかった → これで人が落ちないと思った → 道路が広がった (4) → ▲家への出入りが危なくなった → ▲自転車が家の際を通る → ▲自動車が家の際を通る
昭和44年 バイパス開通					▲危険 (5) → ▲交通量が多い (5) → ▲道路の向こう側へ 渡れない (2)
現 代	注) () は、複数の発言者の数を示す。 ▲ は、わるいイメージをあらわす。 → は、発言の具体的な内容をあらわす。具体的な 内容がある場合は、最初と最後ののみを示す。 □ は、イメージの影響期間をあらわす。	夏祭り → ▲山車がなくなった → ▲花火がなくなった			▲表通りになっていて寂しい 交通量は減った ▲路上駐車がが多い (2) → ▲駐車場が少ない (2)

図-2 個別ヒアリングでの発言内容

商業活動や日々の生活といったソフトな部分にはわるいイメージはないが（現在の状況を過去の賑やかだったところに比べて寂しいと思う意見はある。）、用水や交通に関しては、よいイメージとわるいイメージの両方を持っていて、被験者の評価が分かれている。これは、今日の道路の新設、改良に対する地権者の意見の多様性に相通じるところがある。

上記①～④をもとに、次のキーワードを抽出した。

a. 交通

被験者8名全員が、道路上での交通の話をし、その話の内容は話の年代によって変わってきているが、交通に関する関心は高い。

b. 用水

被験者8名全員が、昔、道路に沿って流れていた用水の話をしている。内容については用水で何かをしたという思い出がよい思い出として、記憶に残っている。

c. イベント

被験者のうち5人が夏祭りの様子を楽しそうに話してくれた。夏祭りに人がたくさんきて賑やかになるのをよい思い出としてもっていることがわかった。現在の夏祭りについては街中の祭り

ということもあり花火ができなくなり、山車もないなどの状況を寂しく思っている。

d. 商店街

被験者は昔の繁栄の様子を話してくれた。日常的な情景としての夕方の縁台将棋は、被験者の思い出に残っているようだ。

e. 景観

景観については、当初予想していたほどの発言者はいなかった。日常生活の中で、隣の建物が建て変わったり、撤去されたりしたことの思い出は、すぐには思い出しにくいと感じた。

(2) 最初の発言内容

次に8名の被験者がインタビューの中で最初に話した項目を聞き取り表-1に表した。被験者数が7名になっているが、残り1名は、全く道に関係ない話題から始まったため除いている。

表-1より、水路に関することが①、③を併せて4

表-1 被験者が最初に話した内容

	最初に話した内容	人数
①	夏祭りに人があふれて、水路に落ちていた	2
②	一脚(縁台)でのコミュニケーション	2
③	以前にあった水路の一般的な話	2
④	道路の現況に対する不満や願望	1

名、一脚（縁台）とそこでのコミュニケーションが2名、夏祭りが①の2名、道路の現況の話が1名となっている。被験者の一番印象に残っているイメージが、最初の発言にでてくると仮定すると、被験者の多くは、昔、道路に沿って流れていた水路のイメージが強く残っているといえる。

（3）道路情景再現図への展開

続いて、図-2 のヒアリング内容を日常生活、非日常生活発言に分け、日常的な発言を道路平面上に道路情景再現図として展開し、非日常生活上の発言を表形式で表した。各発言内容を水路に蓋が掛かる前、蓋が掛かってから国道バイパス開通まで、国道バイパス開通後の3つの時期に分けている。図-3より水路に蓋が掛かる以前の昭和20年前後までは、普段の生活で、沿線住民は道路と水路の両方を利用しているが、水路についてはくつろぎの場や井戸端会議などコミュニティの場として家の際の持つ半私的空間に近い利用方法がなされており、車道部分との利用形態の棲み分けがなされているといえる。蓋が掛かってからバイパス開通までは、外部空間に道路と家の際の緩衝帯であった水路の役割をはたすものがなくなり、かつ、旧街道商店街の建物配置は写真-1からもわかるように前面道路に面して建築されているため、敷地前面に人のたまり場空間がないので、井戸端会議などコミュニティの場は、交通量の増加もあり、外部空間上から消滅してしまっている。同時代に起ったモータリゼーションの発達による自動車交通の増加は、道路反対側への横断のバリアともなり、沿線住民の「交通量の減少、そのためのバイパス建設要望」欲求の一因を生み出している。しかし商店街としては、他の地域の製材所で働いている人たちが買い物にきてくれるなど活気があった時期である。バイパス開通後は、近くに駐車場を持った大型店ができた時期とも重なり、交通量

は減り、路上駐車が残る裏通りとなっていることが道路情景再現図からもわかる。

（4）考察

図-2より、被験者の発言が多い時代は、旧道がまだ本通りであったときで、商店街も繁栄していて、道路上で祭りなどのイベントに参加したり、遊びを体験できた時代であった。そのような状況の道路を心地よく感じている傾向がラダー図から考察される。

5. フォーカスグループミーティングによる回想分析

（1）グループの属性

次に、世代の違う人達の意見を聞くために、2つの違った年齢層の人達に別々に集ってもらい、同じように今までの日々の生活において、対象道路で思い出す楽しかった（よい）イメージ、わるいイメージを自由に話し合ってもらい、その要素と連関を分析した。質問方法は個別ヒアリングと同様である。

参加者は、両グループとも、研究対象道路の沿道に住んでいる人、および研究対象道路から徒歩圏に住んでいる人々である。それぞれの年齢層および性別を表-2に示す。フォーカスグループミーティングは、平成14年5月から6月にかけて行った。

表-2 グループ属性

	年齢層	性別・人数
グループ 1	高校生	女 3名
グループ 2	40歳代	男 3名

（2）女子高校生グループの回想分析

図-4はグループ1の女子高校生の持つ旧街道商店街のイメージラダーである。これより以下のことがわかる。

- ① 保育園の頃、対象道路に接して住んでいた人は、道路に飛び出して車とぶつかりかけた経験があり、

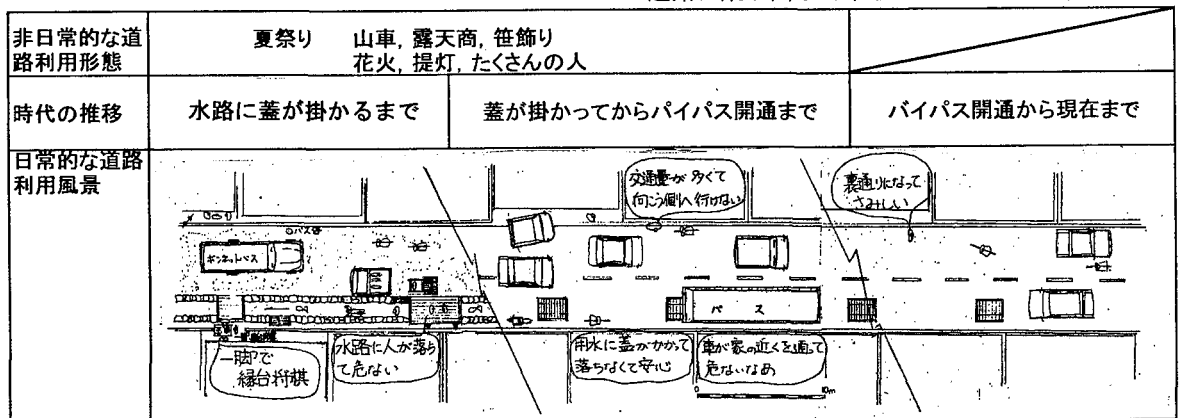


図-3 道路情景再現図

そのイメージを鮮明に覚えている。

- ② 小学生の頃は、活動範囲が広がり、商店街のさまざまな店屋へ行った思い出があり、移動のための交通手段として、自転車を使い始めている。このため、自転車を利用する上で障害となる路上駐車に対してわるいイメージを持っている。また、この頃の夏祭りのイメージをとっても楽しかったイメージとして覚えている。
- ③ 中学生では、夏祭りに対する項目は小学校ほどではなくなったが、兄ががんばって造った山車のことを楽しそうに話してくれた。自転車で走行時の路上駐車車両の危険性は、中学生の時も変わっていない。
- ④ 現在（高校生）は、祭りについては、懐かしい友達に会えるなどよいイメージを持ち続けているが、商店については、店に入りづらかったり、店が開いているのかわかりにくいとため、あまり利用しなくなっている。
- ⑤ 将来の希望としては、商店の内容に対する希望と、道路の形態に対する希望、商店（建物）と道路の距離関係についての希望があがった。

上記①～⑤をもとに、次のキーワードを抽出した。

a. イベント

夏祭りの様子については、準備の様子や祭りの日の様子を鮮明に覚えていて、道路上でのイベントと

してのインパクトは強いことがわかる。

b. 商店

被験者は、発言の中で、具体的に個々の店の利用方法や、その道筋での出来事の発言が目立った。

c. 道路

現在高校生である被験者たちは、商店と彼女たちのもっとも利用頻度が高い交通機関である自転車を結ぶ媒体として道路がある。また、年少の頃に家の前の道路で交通事故に遭いかけた出来事は道路上での思い出として深く脳裏に残っているなど、道路は路上駐車も含めてどちらかといえよくないイメージの場として捉えている。

d. 自転車

被験者たちは小学生の頃から自転車を頻繁に使っているため、自転車が快適に走れる環境の道路を希望している。

次に、表-3 に女子高校生グループが話した話題の順序を示す。

今回はフォーカスグループミーティングのため、

表-3 女子高校生グループの発言順序

発言順序	発言内容
1	路上駐車が邪魔で自転車が通れない
2	おもちゃやへ通った思い出
3	夏祭りの情景

発言内容の キーワード	発 言 内 容			
	イ ベ ント	商 店	道 路	自 転 車
時 代 変 遷 保育園の頃 (平成2～3年)	夏祭り → 御興を担いだ	お菓子屋さんへお母さん、お兄さん、 お姉さんにつれて行ってもらった	▲家から飛び出して車と ぶつかりかけた → 運転手の顔が目の前に見えた	
小学生の頃	夏祭り → 提灯がいい感じ 自分でも提灯をつけた 人がたくさん来てくれる 景品がもらえた 一番楽しかったイメージがある いすを出していると → みんなが集まってきた	おもちゃ屋さんによく行った パン屋さんによく行った → フロースンやかき氷をよく買った お菓子屋さんへよく行った	→ 買った物をして、片手運転で帰る ▲わざわざ歩道橋を渡ってお菓子屋さんへ行った ▲お菓子を食べるところがない → 買った物をして片手運転で帰る	国道は、自転車で 走ってはいけなかった 自転車スタンドが グレーチングにはさまった
中学生の頃	だんじり → 家の前でぐるぐる回っていた → 一度家にぶつかった 夏祭り → 兄が山車を造った → 賞を取った → 景品がもらえた		▲路上駐車が邪魔で自転車が走れない → ▲自転車は、車とすれすれになるので危ない 自動車は電柱にぶつかった ▲国道は通らない → ▲排気ガスでくさい 自転車ではきれいな街並みのところを通る ▲路上駐車が邪魔で自転車が走れない → ▲自転車は、車とすれすれになるので危ない	
現 在 (高校生)	夏祭り → 懐かしい友達に会える	最近では利用しない → ▲あいているのかわからない → ▲入りづらい 高校の近くで買った物をする	自転車ではきれいな街並みのところを通る ▲路上駐車が邪魔で自転車が走れない → ▲自転車は、車とすれすれになるので危ない ▲小学校の送り迎えの車からの飛び出しが危ない	
未来の願望		商店街をカラフルにして欲しい 駄菓子屋、小物屋が欲しい 店の前と道路の距離がある方がよい 友達とお菓子を食べる場所がある	昔のような石積み水路がある道 → きれいな水が流れる	注) 図中の ▲は、わるいイメージを表す。 →は、発言の具体内容を表す。 具体内容が複数ある場合は最初と最後のみ示す。

図-4 女子高校生グループの発言内容

発言順序は、最初に話を始めた人の内容に他のメンバーが影響を受けることは仕方がないが、発言順序で上位に上がってくる発言内容は、発言者が道路に対して感じている強い思いに違いないと判断した。表-3 及び図-4 の中で路上駐車発言順序が1位で、各年代の道路イメージにもでてくることより、今回参加した女子高校生たちは、自分たちが普段利用する交通手段である自転車通行時の道路上での路上駐車状況を道路のイメージとして強く描いているといえる。

(3) 40歳代男性グループの回想分析

図-5 にグループ2の40歳代男性の持つ旧街道商店街の道路イメージを表す。これより以下のことがわかる。

- ① 全体として道路・交通についての発言が多い。祭りについては小学校時代の祭りのイメージが大きく、グループ1の高校生のように小さい頃の祭りのイメージを現在まで楽しいイメージとして持っているということはない。
- ② 旧街道商店街筋に住んでいる人は、小学校1年の時に家から出たところで自動車につま先を踏まれた時の状況や自動車のドアを開けたときに後続車にドアがぶつかった時の状況を鮮明に覚えている。

- ③ 小学生の頃は、道路の下にある用水に入って遊んでいた経験を持っている。道路の下にある用水路網を知っている最後の年代だと自負していた。

上記①～③をもとに、次のキーワードを抽出した。

a. 用水

用水については、4章の年齢層が高い被験者ほど発言はなかったが、用水路に蓋がかかっても、地下の水路網を熟知していることを自慢していて、用水は被験者のイメージに残っているといえる。

b. イベント

被験者たちが頻繁に参加したころの夏祭りのイメージは鮮明に覚えており、店の種類や、小学校を解放しての書道展などをよいイメージとして持っている。

c. 商店

国道バイパスができた時期が小学校の高学年から中学生の時期で当時の様子を覚えていた。バイパス沿いにショッピングセンターができたことや交通量が減り、夜に道路で遊んだことなど、当時はバイパス開通に伴う環境の変化をよいイメージとして感じていた。

d. 道路・交通

高校生の被験者と同じで、道路に面して生活している被験者の一人は、交通事故に遭いかけていて、

発言内容の キーワード	発 言 内 容			
	用 水	イ ベ ント	商 店	道 路 ・ 交 通
時 代 変 遷				
昭和30年代				
小学生の頃	道路の下にある用水に入った ↳ 鮎を捕って食べた	夏祭り → 花火が楽しかった → 教会所の祭りのイメージがある → 小学校を開放して、書道などを 展示した → 山車がたくさんでいて → 商店街にも店屋がでていた → アイスクリュー、金魚すくい ヨーヨー	駄菓子屋、プラモデル屋へ行った	交通量が多かった ↳ オールドバイクが多かった ↳ 馬車が走っていた ↳ 馬の糞があった ▲ 小学1年の時、家からでたときに靴の先を 自動車に踏まれて足を抜かした ↳ 病院に行ってもしばらく立てなかった ▲ 車のドアを開けたとき、後続車面に あたった ▲ 交通事故で2名死んだのを聞いた
昭和40年代	地下の水路網をよく知っている ↳ 自転車屋の下で水路 が分かれている 道路より用水で遊んだ	秋祭り ↳ だんじり ↳ 阿波踊りがあった	商店街では遊ばなかった ↳ 近くの安全道路（歩行者専用道路）で遊んだ	
国道バイパス開通			国道BPに大型ショッピングセンターが できた ↳ 開店の日には人でいっぱいだった ショッピングセンターの駐車場は 満杯だった	信号がなかったので、小学校で信号機の ある交差点を渡る練習をした 夜はバスケットボールの練習をした
中学生の頃				
高校生の頃				
昭和50年代				自転車通学で車に乗けないように走った ↳ 5kmを12分で自転車を漕いだ バスは通学時間帯に1便（8：02発） だけだった ↳ バスは時間通りにこなかった
平 成 現 代	子供がとった魚は、 鮎が食べられている	▲ 夏祭りの、車両規制の範囲が 短くなってきた ▲ 花火がなくなった ↳ 打ち上げる場所がなくなった	郵便局の駐車場は、17時以降および休日は、 利用できるのが便利だ 子供たちは駄菓子屋へ行っている	注）図中の ▲は、わるいイメージを表す。 一は、発言の具体的な内容を表す。 具体内容が複数ある場合は最初と 最後のみを示す。

図-5 40歳代男性グループの発言内容

そのときの様子を鮮明に覚えている。交通事故で2名が亡くなったということを知っていて、小さい頃から、事故が多い道であるという認識を持っている。表-4に被験者の発言順序を示す。

表-4 40歳代男性グループの発言順序

発言順序	発言内容
1	交通量が多かった
2	馬車が通っていた
3	道路下の用水に入って魚を捕った

これより、被験者のこの道路に対して持っているイメージは、小学生当時の交通状況に関するイメージが大きい。これは、図-5のラダー構造図において小学校時代の道路交通のイメージ発言が一番多かったこと、および国道バイパスが完成する時期であった時代背景と一致する。

（4）道路情景再現図への展開

次にこの2グループの発言内容を図-3と同じように年代毎の道路情景再現図に展開することを試みたが、以下の理由で展開が困難であることがわかった。

- ① 高校生グループについては、道路上での行動がダイナミックであるため、1路線の短い区間では表現できなかった。すでに車社会の中で生活しており、道路の形状や交通量の大きな変化を経験していないため、年代ごとの発言内容に変化がみられなかった。
- ② 40歳代男性グループについては、小学生の頃のイメージは、図-2の蓋が掛かってからバイパス開通までのイメージに近く、これについては、再現図への展開が可能であるが、バイパス完成から現在の道路イメージについての発言が希薄なため、道路平面上に展開ができず、年代ごとの道路情景再現図とまらない。

このことより、今回のような年代ごとの道路情景再現図作成条件としては、ある期間を持つ年代毎に道路上の日常生活イメージ発言があり、道路形態や利用方法について目に見えて変わった時期を経験する必要がある。

（5）考察

女子高校生の発言と40歳代男性の発言を比べると両グループとも自分たちが道路上で体験した出来事、例えば夏祭りや用水で遊んだり、交通事故に遭いかけたイメージは、よくもわるくも鮮明に記憶しているため、発言内容をラダー構造図上に描いたときに密度が濃くなっている。特に40歳代男性グループにおいては、小学生の頃に道路上で体験したイメージは強く残っているが、車が日常的に使われる時代になり、用水路は蓋がかけられたり、コンクリートで

固められたり、祭りも縮小傾向にあるなど、被験者自身の道路上での日常、非日常体験が少なくなってきた。高校時代にはバスに乗るためだけに道路を利用したような感じすらうかがえるが、30,40才と年齢を重ねるにつれて、子供達から情報を仕入れたり、商店街全体のことを考えるようになるなど、道路に再び意識を持つようになってきているといえる。40歳代男性グループは、年配の被験者よりもバイパス完成から現在の道路状況についての発言があり、道路状況について普段より観察している傾向がある。

女子高校生については、商店街を自転車を利用しながら活動的に動き回っている。このため、普段の生活で自転車が快適に利用できる道路整備が必要となってくる。そのためには、路上駐車の問題と、通過交通量を減らすなどの対策が必要である。夏祭りについては、たくさんの人が来る道路上での楽しいイベントとして捉えていて、これを維持していくことが必要になってくる。

6. まとめ

回想分析法を用いて沿線住民にヒアリングを行い、その結果をラダー構造で表現することにより、沿線住民の持つ旧街道商店街の街路に対する意識を図上に表すことができた。発言内容を時間軸上に整理することによって、時代時代における人々の活動の様子や、普段の生活の中で個人個人が街路に対して持っているイメージの移り変わりを表現することができた。今回用いたヒアリング手法は、アンケート調査と違い、多くの人々の意見を聞くことはできないが、回想分析を行うことで沿線住民の意識やその連関を抽出する有効な手段になると思われる。

イメージラダーから見る考察は以下のとおりである。

- ① 旧街道商店街沿線住民は、道路上で何かをしたことや、伝統行事など何か行事に参加したということに関しては鮮明に覚えている。人々が道路に出なくなった、出られなくなったことが道路に対する認識を旧街道商店街が本来持っていた道路の多面性から交通問題のみの一面性へと向かわせている。
- ② 歩行者や自転車利用者にとって、交通量の減少は道路利用の快適性を高めるものであるが、実際には、路上駐車や路上駐車車両と通過車両の間にはさまれた空間を利用しているため、ストレスの要因となっている。
- ③ 国道から旧道になり、交通面では自動車交通量が減ってよかった反面、新しいバイパスに大型スーパー等の進出があり、商店街としての機能は低下しているが、今も旧道ならではの駄菓子屋に対する人気

は根強いなど歴史性を生かした店づくりが必要である。現在の商店は、道路前面に沿って立っているが、建替え時には、建物前面に憩いの空間を設けるのも旧街道商店街の再生の一つの方法といえる。

- ④ 夏祭り等のイベントは、年代を問わず楽しい思い出となっていて、道路上に人がたくさんいる状況を楽しんでいる。

以上より旧街道商店街の街路再生のコンセプトは以下のとおりである。

- ① 街路の多様性、多面性の復活。かつて、旧街道商店街は沿線住民が集まって、情報交換をする場であったり、商売の場であったり、子供たちの遊び場であったり、イベントの場であったりと季節や1日の中でも時間帯によって、交通用途以外にさまざまな使われ方をしていた。その機能を少しでも再生させることが課題といえる。

- ② 楽しみの場を提供する街路。旧街道商店街の住民は古くからの伝統に育てられ、それを守りながら生活している。祭りなど伝統行事は、これからも旧街道商店街の街路利用のひとつとして、維持、発展させていかなければならない。

こうした街路再生コンセプトを実現するために次のような方法があるのではないだろうか。

- ① コミュニティーの強化。旧街道商店街は、郊外型の商業地区と違い、歴史のある昔ながらの地域コミュニティが、衰弱しながらも残っている。このコミュニティを活用し、夏祭りや商店街のイベント

などを維持、さらには復興していく必要がある。

- ② 街路空間の時間分割利用。日本各地では日曜日や朝市が開かれる道路など、1週間や1日の中で道路の使い分けを行っているところもある。また、自動車を完全に封鎖しなくても、浮沈式のボラード等を設置することで自動車交通の優先比率や路上駐車を時間的に調整することができ、自動車・歩行者・自転車共存した新しいタイプの旧街道商店街の再生が可能になると考えられる。

今後は、こうしたヒアリングの意見や再生コンセプトをもとに、旧街道商店街の具体的整備手法を導く方法、そのための官民の協働手法について検討することが課題である。

参考文献

- 1) Report of the Bypass Demonstration Project: Better Places Through Bypass, pp.8-14, 1995.
- 2) 安藤直見, 八木幸二, 茶谷正洋: 都市中心部における街路空間のイメージ分布, 日本建築学会計画系論文集第 497 号, pp.155-162, 1997
- 3) 平野勝也, 資延宏紀: 街路イメージ類型を用いた繁華街構成分析, 土木計画学研究・論文集, No.17, 533-540, 2000
- 4) 讃井純一郎, 乾正雄: レパトリー・グリッド発展手法による住環境評価構造の抽出, 日本建築学会計画系論文集第 367 号, pp.15-21, 1986.

回想分析を用いた旧街道商店街の街路イメージの分析*

亀谷一洋**・山中英生***・三宅正弘***

近年の交通需要の増大に対応するため、地方の小規模市町村で中心街を迂回するバイパスが整備された結果、旧街道筋が裏道化し、町の中心商店街が衰退するという現象が相次いだ。本論文では、旧街道商店街の再生方法を考える第一のステップとして、歴史的経過を経験している旧街道商店街の沿線住民が前面街路に対して持っているイメージを把握するため、回想分析を用いて、沿線住民に個別インタビューを行い、結果を時間軸上にラダー構造で表現した。また、少人数のフォーカスグループミーティングの結果も同様の手法で街路イメージの把握が可能であることがわかった。この手法から旧街道商店街街路再生コンセプトの提案を行った。

A Study on Image of Old High Streets Using Analysis of Memories on The Street*

By Kazuhiro KAMETANI**・Hideo YAMANAKA***・Masahiro MIYAKE***

Since it corresponded to the increase in traffic demand in recent years, the bypass, which bypasses the center of commerce in local small-scale towns was fixed. Consequently, Old High Streets became back streets. The center of the town declined. In this paper, to grasp the image, an individual interview was held with along-the-line residents. And it was which expressed the result with rudder structure on the time-axis. A small number of people's focus group meeting was also found by that grasp of a street image is possible by the same method. The street reproduction concept was proposed from this approach.